

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2190200168		
法人名	株式会社 イービーエーサービス		
事業所名	グループホーム せきの憩		
所在地	岐阜県関市塔ノ洞2601番地		
自己評価作成日	平成26年 6月27日	評価結果市町村受理日	平成26年 9月 5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_2014_022_kan=true&JigyosyoCd=2190200168-00&PrefCd=21&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 中部社会福祉第三者評価センター		
所在地	岐阜県関市市平賀大知洞566-1		
訪問調査日	平成26年 7月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

職員すべてがご利用者さまについて考える姿勢を持ち、それに伴いご利用者様一人一人に寄り添ったケアプランの作成に職員全員が関わること。そして、ケアプランを確実に実施することで一人一人に合った支援が提供できるようにしています。こじんまりとしたホームの特性を生かし、居心地の良い雰囲気作りを心がけています。専門職も関わることでご本人らしい生活の継続が1日も長くできるようなケアを提供しています。季節感のある行事などを多く取り入れ、常にわきあいあいとした楽しい雰囲気で生活していただいています。地域とは、お祭りや草刈りへの参加などで親交を深めさせていただき、昨年度からは災害時の名簿にも記載していただけるなどホームも地域住民として大切にいただいています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームの経営母体が大きな法人に代わったことにより、組織・管理面が充実し、ホームや職員の目指す方向性が明確になった。これまでの管理者、職員が継続して勤務しており、利用者との馴染みの関係や暖かな支援が担保され、利用者や家族への影響は全く出していない。
新法人の方針として、職員の育成面にも積極的に取り組んでおり、管理者や職員向けの各種の研修や勉強会が開催され、職員個々の資質の向上が図られている。
これまでの評価では、「その人らしい居室づくり」が課題として挙げていた。度重なる家族への呼びかけも功を奏さなかったが、今回評価時には「その人らしさ」の感じられる居室が増えていた。さらに、利用者が居心地良く過ごせる居室づくりが進むことを期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「住み慣れた地域と共に」という言葉を含む理念を掲げており、なぜ地域密着型なのかを職員全員に周知し、その意味を共有し、地域とのつながりの大切さを考えケアにつなげている。	運営法人が替わり、理念だけでなく支援の質にも変化が見られる。「ケアプラン重視」や「職員研修の充実」等、これまでにはなかった方向性が打ち出されており、職員の意識の变革も進んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に入会しており、地域のお祭りへの参加(今年度より子供みこしは廃止となったがお供え物や子供会へのお菓子の提供は継続している)や地域の草刈りへの参加などをしている。	地域には子どもの姿が少なく、過疎化が進む地域特性の中、地域との交流や連携が取りづらくなっている。獅子舞集団や大学生のボランティアの来訪が、利用者に新鮮な刺激を与えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議への参加依頼を地域の住民の方にもしており、参加いただけた際には介護相談などお気軽にお声をかけてくださるようお話ししている。実際外に職員が出ている時に立ち話のような形で介護の悩みを伺うこともある。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議内ではホームの報告と共に出席者からの率直な意見や提案をいただいている。夜間の人員配置など変えられない内容もあるが、実行できそうな内容については取り入れさせていただいている。	2ヶ月に1度、規定通りの運営推進会議を開いているが、家族の参加はほとんどない。	開催日(曜日)や開催時間等を工夫し、家族が出席しやすい条件をそろえることで難局を打破して欲しい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	頻回に市役所には伺っている。その際、現在の状況など報告させていただいている。事故報告書なども提出が必要な際には迅速に提出するようにしている。推進会議にも参加していただけている。	生活保護受給者の受け入れが3名あり、介護保険担当課以外にも市との連携がある。運営推進会議の行政枠では、市の担当者のほか、地域包括支援センター職員の参加もある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎日本社の掲げる介護の心得5か条を職員が声に出し読み上げている。現在、玄関の施錠も夜間のみとしている。言葉での拘束、薬での拘束なども念頭に入れ職員研修の際にも説明、周知を実施している。	新しい体制(運営母体の変更)になり、職員への教育・研修が充実している。玄関の施錠を解き、眠剤を始め薬の使用を減らし、言葉による拘束や虐待にも注意を払う等、職員の意識の变革は大きい。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月の職員研修内で虐待防止委員が具体的な内容などを調べ発表し討論を行っている。施設内での虐待事例だけでなく、周囲で起こっている時の留意点なども確認している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今のところ後見人が必要な状況の方は入居されておらず活用の実施には至っていないが、いろいろな環境の方が生活されているため、常に必要時には対応できるように情報収集は行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、契約書、重要事項説明書の読み上げ確認を行ったうえで契約の締結を行っている。改定の際は運営推進会議内での説明や家族へ直接の説明、文書での説明を行い、問い合わせに即対応しご理解をいただいた。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時などには職員からの話しかけを必ず行い、現状の説明や世間話などを話しやすい環境づくりを心がけている。玄関には第三者相談機関のチラシなど設置し何かあれば報告して下さるように周知を行っている。	家族の訪問時には、管理者や職員が家族の意見や要望を聞いている。しかし、運営推進会議や家族会への参加が少なく、家族の意向が十分に吸い上げられているとは言い難い。	利用者の入れ替わりのタイミングを利用し、新しい家族への「積極的な参加」の呼び掛けに期待したい。また、「行事計画」に、利用者と家族とが常同出来る工夫を望みたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常的に職員の意見などを聞くようにしている。スタッフミーティングでは環境整備委員が中心となり働きやすい環境づくりの提案をってもらう機会を設けている。そして、その内容を反映した環境づくりを心がけている。	法人の方針もあって、「初任者研修」への参加に力を入れている。ベテラン職員と若年の職員が多く、中堅を担う職員が少ないという職員バランスの悪さはあるが、職員間のチームワークはできている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	本社での会議や、エリアでの会議などで管理者から些細な内容も報告することになっており、職員の雇用形態や勤務実態や評価まで把握している。その上での確かな指示を出し、環境整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社内の研修は多岐にわたっており、新人研修から専門職への研修など毎月実施されており、参加が義務付けられている。ホームでの研修も実施されている。外部の研修についても協議会への加入などをして環境があり参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	岐阜県グループホーム協議会への加入をしており研修や会議などに参加し交流を行っている。市町村での交流会などにも参加し、同じ市町村内の介護施設同士の情報交換の場となっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にアセスメントを必ず行っており、その際には些細なことであっても教えていただくようにしている。それにより今まで過ごしてきた生活リズムの把握やご本人の要望、慣習などを把握し、ケアにつなげている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前のアセスメント時からご家族との関係づくりを密に行っている。その際にはご家族の状況や要望、ご本人との関係なども含めお伝えいただいたり、把握させていただいている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初回のアセスメントを行う段階で現在の状態状況の把握をしている。ご本人、ご家族にとって今必要なことは何かを見極め、状況によっては当ホーム以外の介護サービスの説明なども行っており、必要であれば事業所などもお伝えしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	協同した作業の中で職員が常に指示を出したりするようなことはなく、利用者の中のどなたかが得意とされている事柄などについてはその方から知恵をいただいたりしながら行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月のおたよりや利用状況報告書などを活用しその中でご家族に対応をお願いしたりしてご協力を依頼している。必要時には面会時電話連絡なども行い施設のみでの支援にならないようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご自宅のある地域の行事などへの参加の意向をご家族から連絡がなかった時などはこちらからご家族にお伺いしたこともある。外出時にご自宅の近くに行くこともある。	実の妹が経営する床屋へ通う利用者がいる。かつて住んでいた地域の「敬老会」への参加を心待ちにしている利用者には、情報を集めて出席が出来るように支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	以前に比べても利用者同士が声を掛け合っ生活されていることが増えている。世間話や昔話などを共有スペース内でご利用者様同士で話している姿があり、必要時には職員も関わりながら関係づくりに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現在のところご逝去での退去のみであるため、終了後に特にフォローさせていただいた実績はないが契約終了時ご家族に今後も必要に応じてご協力させていただく旨をお伝えしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	暮らし方の希望について出来る限りは意向を汲むような対応ができるような環境をつくるようにしている。現在の利用者は全員がご自身の意思を伝えられる身体状況なので、事細かく尋ね意向を常に把握するようにしている。	日々の係わりの中で利用者の思いや意向をつかみ、「介護記録」に記録している。月に2度のミーティングで話し合い、職員が情報を共有して支援につなげている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日々の会話や援助の中でその方お一人お一人の価値観や習慣などを把握し、援助の中に組み込むようにしている。ご本人からくみ取ることが困難な場合はご家族にご協力をいただいている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	年齢、性別や家族環境などいろいろな方向からその方の今の身体状況などもふまえて観察させていただき、現状の把握を常にするように心がけている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	御家族には面会時や電話連絡などで意向を伺い、毎月のモニタリングは確実に実施している。医師など専門職にも必要時都度連絡し介護計画に盛り込んでいる。	毎月モニタリングを行い、ほぼ3ヶ月ごとに再アセスメントを実施している。それらを基に、ADL中心の介護計画が作成されており、支援した内容は「介護計画」に連動させて記録している。	その人らしさを支援する「個別ケア」の観点からも、23番項目(意向の把握)でつかんだ意向の中から、介護計画に取り上げて支援する事例が増えていくことを期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録はご本人の姿が記録から見えるような記録を残す努力をしている。ケアプランの変更や追加などの提案が現場から出る程ケアプランは現場に浸透している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の状況や本人の今までの生活環境など個々に違うため、その状況に合わせて柔軟に対応するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の住民の方の訪問や、なじみのある地域から伝統芸能の慰問。なじみのある場所への外出など行い、地域とのつながりを継続できるように支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診はご本人とご家族の意向をお聞きし、ホームへ定期的に内科医と精神科医、歯科医の往診もあることをお伝えした上で一番安心していただける方法をとるようにしている。	ほとんどの利用者について、往診対応の協力医がかかりつけ医となっており、安心した受診体制が構築されている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常に介護職は心身状態に気を配り、気づいたことがあれば記録に残し、看護師の出勤時に伝えるようにしている。緊急時などは即連絡を取り適切な指示を受けるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時退院時には互いにサマリーの作成を確実にし、伝達が確実にスムーズに行えるようにしている。入院中には定期的に訪問し状況の把握や病院からの問い合わせなどがしやすいようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化した場合や看取りになる場合の指針についての書類を取り交わすのに加えて、今後の希望などもお聞きするようにしている。希望が変わる場合もあるため、さまざまな機会でお訊ねするようにしている。	利用開始時に、重度化した場合の家族の意向を聞いているが、その後も家族の意向に変化がないか、繰り返し尋ねている。家族の意向を汲んで、看取りを実施した経験もある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	看護師が定期的に指導や、研修を行っている。緊急時の見極め方などの一覧表やチャート表などを作成し現場ですぐに活用できる位置に保管してある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を行うとともに、実際起こった時にはどういった動きをするべきかを職員会議などで全員で考える機会を作っている。自治会からは応援の承諾をいただいております。避難者名簿に人数の記載もしていただいている。	ホームにAEDが設置してあり、適切に使用するための訓練も行っている。管理者は、救急救命の知識や技術が陳腐化しないよう、繰り返し訓練を実施するよう計画を練っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	接遇5原則ルールを掲げ、毎日唱和を行い どういった対応をしなければならないのかを 確実に周知し実施するように努めている。	法人の理想とすべき接遇のあり方が、「挨拶」、「態度」、「表情」、「身だしなみ」、「言葉づかい」の5項目に分けて定められている。 職員はそれらを習熟し、利用者の尊厳を保つ支援を心掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	常に介護者側からの強制や押し付けにならないようにご希望を伺うようにしている。職員には何でも好きなこと話して下さるような関係づくりをしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	健康面などにも配慮しながら、お一人お一人の生活リズムを汲ませていただいている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	希望されたときには美容院へ出かけたり、ご自宅からお気に入りの洋服を持ってきていただいたりしている。毎日1日に何度も鏡の前で整容されている利用者もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は特に楽しみにされていることもあり、食事作りへの参加はとても積極的に行ってくださるためいろいろな場面での参加を促すような援助を行うようにしている。	利用者の入れ替えが進み、自立度の高い利用者が増えてきたこともあって、職員による食事介助はほとんど見られない。メニューは法人が決めており、栄養、健康面を考慮したメニューとなっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士が組んだメニューのお食事の提供を実施しているとともに、水分補給については楽しみながら行える様にいろいろなものを準備し選択していただけるようにして水分量の確保ができるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	お食事後の口腔ケアはおひとりおひとりの力に応じて行っており、最初は嫌がられていた方も今では習慣となり、簡単な声かけで自分から行かれる姿もみられる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	その方に合わせた排泄パターンを見極め、時間を見ての声掛けやタイミングを見計らった声かけ援助を行いご本人の自信にもつながるように努めている。	排泄自立しており、昼間は布パンツで過ごす利用者も多い。夜間、おむつや紙パンツを使用せずに、居室にポータブルトイレを持ち込んで、自立した排泄の継続に取り組んでいる利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	メニュー外でも朝にヨーグルトをお出しするなど排便につながるような内容でのお食事の提供ができるように配慮している。水分量なども把握し、排便がスムーズに行えるような工夫をしている。必要時には医師にも相談をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴日は決まっているが、入浴順は決めていない。その人その人になるべく合った入浴時間やタイミングで入浴していただくようにしている。夜間は職員が1人の為、事故防止もあり行っていない。	それぞれの利用者が、週に2回は確実に入浴できる支援を行っている。入浴を好まない利用者については、トイレの支援のついでに誘ったり、声掛けのタイミングに配慮したりと、様々な工夫がある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	基本的にはお好きなように1日を過ごしていただいている。日中は長時間の臥床になるような時にはお声かけさせていただいたりするが、ご自身のペースでお過ごしいただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬に関してはまずは事故や誤薬などが起きないように3段階のWチェックを行っている。そして、既往なども職員すべてに周知してこのような症状の時は報告などの指示をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者ごとにお好きな作業、得意な作業を常に意識しながら行っている。役割がほしい決めておりこちらから依頼しなくても進んで作業をしてくださる姿もみられる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	「桜が見たいね～。〇〇さん、この間見てないから見せてあげたいわ」など利用者から職員に提案いただくときもあれば、こちらから提案し、実行することもある。ご家族が外出に連れていかれることもよくある。	家族の協力があって、家族と帯同して外出する利用者がある。初夏の風物詩「しょうぶ見物」には、利用者全員の参加が実現した。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご自身で現金を持っておられる方ばかりではないが、持っている方に関しては機会を見てご自身で買い物をしていただくなどの支援を行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	耳が不自由なために電話での会話が困難な利用者に関しては代行して電話をかけることもあるが、手紙を書き職員に投函を依頼されたものなどは快く引き受け投函している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間については、利用者ごとに価値観も違い照明をすべて消してしまわれる方などもおられるが事故防止のためにも常に職員が配慮して活動時間内は暗くならないようにしている。温湿度も時間ごとに確認し快適に過ごせるようにしている。	利用者同士の会話も増え、利用者が生き生きとした表情を見せて、リビングで思い思いに暮らしている。利用者の入れ替えで平均介護度が下がったこともあり、利用者それぞれに生活感が感じられるようになった。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	いくつかのコーナーにわかれて過ごしていただけのようにしている。玄関のテーブルなどは新聞をゆっくり読むのに使われ、テレビ前のソファではいつも会話が弾んでいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室が狭くなってしまった方もおられるが、ご自身の筆筒などを持ち込んでいただいたり、入居時必要があれば運ぶお手伝いも行い、居心地良い居室になるようにしている。	過去の評価では、何度も「利用者らしさの出した居室づくり」を課題として取り上げてきた。家族への呼びかけも功を奏せず、目に見える改善は見られなかったが、今回調査では生活感の感じられる居室が増えていた。	女性利用者は、亡くなったご主人の位牌と遺影を居室に持ち込み、ホームでの生活に落ち着きを取り戻した。さらに、その人らしさや生活歴の感じられる居室が増えることを望みたい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	家具の配置などは車椅子での移動の方がご自身で移動しても動きやすいように工夫したり、お手洗いに大きく表示したり、居室前の名札も大きくわかりやすいようにしている。		